

共同研究 ● 贈与論再考—「贈与」・「交換」・「分配」に関する学際的比較研究（2012-2014）

人類が他の動物と大きく異なる点は、自分の意志でモノや食べ物を他の個体に与えるという利他的行動をより頻繁にとることである。人類の持つ利他性には、進化の過程でヒトが獲得してきた感情、記憶力、思考能力が深く関わっているとされている。利他的行動の典型とされる贈与行為は、社会ごとに異なった形態や特徴を持つ。本共同研究「贈与論再考」では、人類の贈与行為についての理解を深めるため、2012年10月よりスタートした。

本年度の第1回共同研究会では、共同研究のメンバー3名より、ユーラシアにおける贈与と交換というテーマのもと、日本の災害支援としての慰問袋、モンゴルにおける移動式住居ゲルの譲渡、そしてカザフスタンの婚姻儀礼と死者儀礼における贈与について研究報告が行われた。本稿ではこれらの事例をもとにマルセル・モースの贈与論を再考する。

### 災害支援時の慰問袋

日本にはお歳暮やお中元、冠婚葬祭の祝儀・不祝儀などさまざまな贈与慣行がある。それらの中でほとんど研究されていないのは、慰問袋の贈与である。山口睦（亜細亜大学非常勤講師）は、日本における風水害や地震災害の時に贈られた慰問袋の研究を行っている。災害支援には、金銭、物資、労働という3つの支援があるが、物資の支援の中には被災者の生活に直結しないお菓子や文房具の「贈り物」があるという。

日本の慰問袋の起源は、米国のキリスト教婦人矯風会が前線の兵士へ慰問袋を贈っていたことを、日露戦争期に日本の矯風会が真似て始めたことに由来する。そしてこの兵士に慰問袋を贈ることは、1937年に国民精神総動員実施要綱として制度化された。しかし、日本では兵士を対象とするだけでなく、社会的弱者を対象とする慰問袋もあった。

山口は社会的弱者を対象にした慰問袋の歴史を調べ、1906年に東北凶作地の貧しい子供たちに宗教団体連合会が慰問袋を贈った事例、1934年の室戸台風の被災児童に大手新聞社が中心となって慰問袋を贈った事例、2011年の東日本大震災の被災者に支援者が花やチョコレート、メッセージを贈った事例を報告した。慰問袋の作り方とその中身にはいくつかのパターンがある。1934年の室戸台風の場合は、朝日新聞社と東京連合婦人会が市

民からの義援金を利用して、高島屋に依頼して鉛筆やノートなどの文房具からなる慰問袋を作り、被災地の学校に送り、学童に配布している。

慰問袋の特徴は、贈り手もしくは寄付者の住所氏名の記載があることと、日用品や手紙など生活必需品以外のモノも含まれ、慰め、災害見舞、お楽しみ袋であることだという。

慰問袋の流れを見ると、贈り手から仲介者団体を經由して、贈り手と直接的な関係を有していない第3者に与えるという、一方向的な贈与となっている。しかも、贈り手の住所氏名やメッセージが添えられることがあるものの、一対一の対面的な贈与ではないし、贈ったモノが贈り手に戻って来ることもない。

### モンゴルにおける移動式住居ゲルの相続

風戸真理（北星学園大学短期大学部）は、モンゴル文化に深く根ざした象徴物としてのゲルに着目し、その譲渡について報告した。モンゴルの遊牧民社会は核家族世帯、父系出自、末子相続を特徴とし、一般人の主な相続品は家畜とゲル、家財道具であったという。親は息子が結婚する時に新しいゲルを与え、末子が親のゲルを相続するのが一般的であった。風戸は、ゲルは世代を超えて受け継がれ、使用されることにより親や祖父母の人格を帯び、家系の記号となり、祖先との関係性において他人への譲渡が不可能なモノになったと考えている。

ところが、社会主義体制下のモンゴルでゲルの大きさは国家によって規格化され、その後の自由化体制下になるとゲルは中古市場でネット販売されている。この事例は、他人に譲渡が不可能であったものが、市場経済の影響によって、譲渡可能なものになったことを示している。すなわち、ゲルは父子間での贈与の対象であったものから非関係者間での金銭に

よる交換の対象に変化した。現在のゲルについては、親から子供への贈与と他人同士での商品交換（ゲルと金銭との交換）の両方がある。モンゴルの事例は、贈与などに関して国家や市場経済の影響が重要である点を示している。

### カザフ社会の結婚儀礼と死者儀礼

ムスリム社会では、イスラームの教えである喜捨（社会的弱者や困っている人への施し）



婚姻にともなう贈り物の準備（2005年、カザフスタン、パヴロダル州バヤナウル地区、藤本透子撮影）。

が重要である。この贈与では、相手からの返礼を期待せず、アッラーから善行の報酬が与えられることを期待する。しかし、藤本透子（国立民族学博物館）は、元遊牧民、ムスリム、社会主義の体験という特徴を持つカザフ社会では、贈与や交換の体系はイスラームの教義のみからでは理解できないと指摘する。

藤本は、カザフ社会の贈与は2つに分けることができるといふ。一方は、「スイクル」（贈与品）と呼ばれるもので、相手に敬意を表すための贈り物やもてなしで、相互に贈与しあうことが前提となっている。たとえば、子供の誕生と成長にともなう儀礼、結婚や葬儀に関連する贈り物の交換がそれに相当する。これらの贈与は関わる人びとの人間関係を構築し、維持する機能を果たしている。

もう一方は、「サダカ」（喜捨）と呼ばれるもので、アッラーにかかわる贈与である。その中に死者儀礼の時になされる贈与やもてなしがある。死者儀礼には葬儀や祖先を顕彰するアスと呼ばれる儀礼がある。アスは、大規模な食事のもてなし、クルアーン朗唱、競馬などを行う儀礼で、ソ連時代には中断されていたが、1990年代に復活した。藤本は、アスにおけるクルアーン朗唱やもてなしは、(1) 祖先による生者への報酬、(2) アッラーから死者への報酬、(3) アッラーから生者への報酬をもたらすと指摘している。

以上のように、現在のカザフ社会には、贈与した相手からの返礼が期待される贈与と、贈与した相手からではなく神と祖先からの返礼が期待される贈与が存在している。これらの贈与には、関係性の構築や維持、富の再分配の社会的効果が付随している。また、死者儀礼を生者が名声を得る手段としても利用している。

### ユーラシアの事例と贈与論

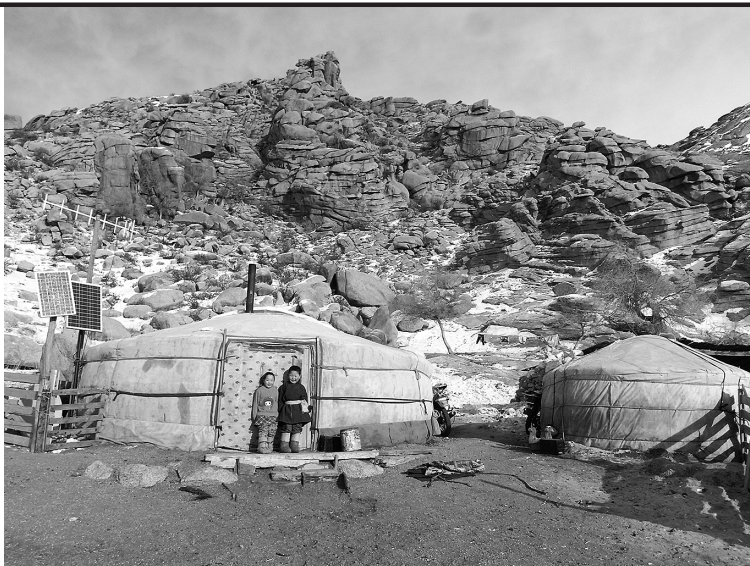
これまでアフリカ地域やオセアニア、北アメリカの贈与や交換、そして霊長類の分配行動について検討してきたが、ユーラシアの事例を取り上げることによって、比較の視野がさらに広がった。

以前に検討した事例は対面的で神を介さない事例が多く、人類社会に存在する大半の贈与は互酬的かつ義務的であり、経済的特性のみに還元できない社会的や宗教的などの意義を持つ社会現象であるというモースの主張を支持する事例が多かった（岸上 2013）。しかし、日本の慰問袋、モンゴルのゲルの譲渡そしてカザフスタンの死者儀礼の事例は、モースのいう「贈与」の特徴とかならずしも合致していない。また、これら3事例は、歴史的な要因が贈与と実践の継続や変化に大きな影響を与えていることを示しており、歴史的変化と歴史的な重層性を考慮する必要がある。

多様な事例を検討すればするほど、それらの事例を比較検討することが困難になってきた。多様な事例を比較するためには贈与と交換の概念の明確化が不可欠であることも再認識させられた。

### モースの贈与概念と交換概念

モースの著作は世界の多様な贈与事例の壮大な比較研究という側面を持つ。しかし、モースは贈与とは交換であると主張する一方で、それらを異なる意味を持つ概念としても使用している。このため、何を贈与と捉え、何を交換と捉えるか



冬の草原のゲル（2012年、モンゴル、トゥブ県、風戸真理撮影）。

の区別が難しいが、森山工（東京大学）は、両者を区別することの重要性を指摘している。

森山は、「贈与と交換とは、現実の社会的様態としてはさまざまな中間領域を含むのであるが、反対給付にかかわる法的な条件性、ないしは無条件性という点で原理的な差異をもつもの」（森山 2014: 478）と指摘する。そして、彼はある給付をめぐり、与えた側が、その給付に対する対価を法的に、正当に、要求する権利を持っている場合が「交換」であり、権利を正当に主張できない場合が「贈与」として、両者を区別する（森山 2014: 477）。

この定義に基づけば、日本の慰問袋とモンゴルにおけるゲルの伝統的な相続、カザフスタンの死者儀礼におけるクルアーン朗唱やもてなし、共食は贈与に、ゲルの金銭による譲渡とカザフスタンの人生儀礼の多くの贈り物は交換に分類することが可能である。

### 今後の課題

本共同研究では、世界各地の贈与や交換に関する事例を比較検討してきたが、それぞれの多様性と大半の事例で贈与が制度化されている点が際立って見えた。また、モースの贈与論の贈与概念にあてはまらない事例も多々あった。これまでの事例のみならず、今後はボランティアの支援活動や政府の開発協力までを含む多様な利他性を、記述、比較、分析するための概念として「贈与」や「交換」を検討し、再構築することが次の大きな課題である。

### 【参考文献】

- 岸上伸啓 2013 「北アメリカ先住民の事例からモースの『贈与論』を再考する」『民博通信』143: 12-13.
- 森山工 2014 「訳者解説—マルセル・モースという「場所」」マルセル・モース著、森山工訳『贈与論 他二篇』pp. 467-489 岩波書店。

### きしがみのぶひろ

国立民族学博物館研究戦略センター教授。専門は、極北先住民社会の文化人類学研究。主著に『クジラとともに生きる—アラスカ先住民の現在』（臨川書店 2014年）、『イヌビャット写真帳—パロー村の暮らし』（風土デザイン研究所 2014年）、『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』（世界思想社 2007年）などがある。